

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：32641

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00407

研究課題名(和文)アーネスト・ヘミングウェイ短編作品における文体美学とリアリズムの体系的研究

研究課題名(英文)A Comprehensive Study of the Stylistic Aesthetics and Realism in Ernest Hemingway's Short Stories

研究代表者

河田 英介(Kawada, Eisuke)

中央大学・人文科学研究所・客員研究員

研究者番号：10756266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、20世紀米国作家アーネスト・ヘミングウェイの1925年から1936年までの短編諸作品における文体(スタイル)の分節化からその文体美学とそのリアリズムがつくりだす修辞芸術性を明らかにし、イデオロジカルな言説がこれまで解体してきたヘミングウェイ文学を修辞・審美の地平から問い直し、再統合を試みた。「キリマンジャロの雪」(1936)を重心的テキストとして、他の関連テキストを分析することで、本研究は作家の文体美学が「ディスフィギュレーション(脱=形象化)」と呼ぶべき表現手法を目指しており、それは最終的に<カタチ>を消散させ、<白>という(虚)無に向かう書法のメカニズムを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、現代世界が様々なイデオロギーによってますます分断化されている状況において、人文科学の基礎的研究として価値をもつものである。というのも本研究は、人間の感覚に共通する審美的感性を基に、国境・人種・文化を超えて伝播されていく<スタイル>という修辞芸術性の観点から短編作品を読み直し、分断された世界を再統合するための枠組みを文学的言説から提出することだからである。文学研究の潮流が<スタイル>を過小評価する偏った潮流にあることから、本研究は文学作品の審美的性質を再検討することによって、より包括的な観点から文学作品と文学研究の存在意義と実践的な社会的有用性をあらためて再確認したものである。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to clarify the stylistic aesthetics and the rhetorical artistry of Ernest Hemingway, specifically in the short stories from 1925 to 1936. Through these texts, this study questions and reintegrates Hemingway's works from the aesthetic and rhetorical perspective which ideological discourses have so far deconstructed. By taking "The Snows of Kilimanjaro" (1936) as the central text and analyzing the styles and their evolution of other works, this study reveals that the artist's stylistic aesthetics aims at a method of expression that should rather be named "disfiguration" instead of "iceberg theory." Consequently, this comprehensive study demonstrates that such stylistic aesthetics unveils the mechanism by which it ultimately dissipates all kinds of "form" and heads toward the color "white," which signifies nothingness.

研究分野：英文学および英語圏文学関連

キーワード：モダニズム アーネスト・ヘミングウェイ 詩学 文体美学 アメリカ文学 ジェンダー セクシュアリティ 20世紀アメリカ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

20世紀米国作家アーネスト・ヘミングウェイ(1899～1961)に関する学術的研究は、1950年代から自伝研究、60年代の伝記批評、70年代の象徴解釈を中心とする新批評、80年代の人種・性差・セクシュアリティ批評、そして90年代以降の新歴史主義批評までの間、本質的には、(1) 諸作品がその水面下でどのような環境及びイデオロギーの中で成立するのか、(2) その影響下で、作品の修辞がどのような意味を成立させているのか、という二つの大きな問いと格闘してきたと言っても過言ではない。巨視的に言えばつまり、先行研究の目標は、作家の「冰山理論」的技法が氷山の水面下の八分の七に隠蔽したイデオロギーを掘り起こし、それを根拠に作品修辞を意味づけることだったと言えるのである。

一世紀近くにわたるそのようなイデオロギー的読解の集大成として、近年出版されたD. ModellmogとS. del Gizzoによる*Hemingway in Context* (2013)が象徴するように、ようやく全短編作品において隠蔽されるイデオロジカルな記号体系が明らかになりつつある。しかし、「冰山理論」の技法によって作品の水面下に隠蔽される諸イデオロギーの記号体系を捉える研究の潮流は、同時にその反作用として、作品の表面に残される修辞テキストが「脱=イデオロジカルな言語芸術」である新たな地平を示してくれたのである。これはつまり、これからのヘミングウェイ研究の新たな切り口として、脱=イデオロジカルな「審美的地平」から作家の文体、文体美学、リアリズムの手法を捉える修辞芸術性の研究が必要であることを意味する。このような学術的背景は、本研究がイデオロジカルな根拠に紐づけられてきた氷山の水面上の八分の一を、意図的にその根拠から切り離し、独立してその修辞芸術性を同定する必要性を強く導く。

2. 研究の目的

本研究が作家の短編研究を行うその目的は、ヘミングウェイ文学全体の要に隠された審美的特質を、短編の文体とリアリズムから明らかにすることである。ヘミングウェイ自らの短編作品を前衛的小説技法の実験場としたことから、短編研究はヘミングウェイ文学全体の核心的技法を最も効果的に詳らかにしてくれる。しかしこれまでの短編研究の潮流は、テキストに隠蔽される文化・歴史的なイデオロギーの分析に強く依拠しているため、ヘミングウェイの作品の文体修辞が織りなすシニフィアン(記号表現)の多くが、シニフィエ(記号内容)によって定義づけられてしまっている。それ故本研究は、短編作品の作品修辞に特化し、その文体・文体美学・リアリズムが映し出す修辞芸術性を脱=イデオロジカルな地平から捉え直し、ヘミングウェイ文学全体の要に秘められた審美的性質とその文学が現代においてもつ多元的可能性と価値を測定・解明するのである。

本研究は、今日の現代世界が様々なイデオロギーによってますます分断化されている状況において今日の現代世界が様々なイデオロギーによってますます分断化されている状況において価値をもつものである。というのも本研究の眼目は、人間の感覚に共通する審美的感性を基に、国境・人種・文化を超えて伝播されていく<スタイル>という修辞芸術性の観点から短編作品を読み直し、分断された世界を再統合するための枠組みを文学的言説から提出することだからである。その他、文学研究の潮流が<スタイル>を過小評価する方向にあることから、本研究は文学作品の新たな審美的性質を提出することによって、文学作品と文学研究の存在意義と社会的有用性をあらためて再確認することを目的とする。

3. 研究の方法

1990年代以降のヘミングウェイ研究の多くがこれまで、作品の外に存在する解読格子に依拠して小説内世界の文脈を特定してきたため、初期批評を抜かせば、その修辞芸術性が独立した形で測定されているとは到底言えない。それ故、先行研究がこれまで示したきたように、“The Snows of Kilimanjaro”をヘミングウェイの芸術的な到達点としての文体として据え置き、その上で、調査対象の作品との比較から、その到達点としての文体美学の発展の軌跡を詳らかにしながら、それが実現しているリアリズムとその手法を分節化・体系化する、独自の調査手法の必要性があると言える。

そのため、既に「研究スタート支援」(2015年採択課題#15H06066)を通して調査した六つの短編研究の射程をさらに拡大し、本研究では1925年以降から30年代後半までの短編群から「ヘミングウェイの文体美学とリアリズム」という視点からその書法を体系化し、それを解明することが目標である。方法としては1920年代から30年代末までのヘミングウェイ作品の中でも顕著に作家の書法の特徴を強く帯びる代表的な短編作品を調査し、仮説立てを行い、テーマ別論文の執筆を行った。具体的に調査したメインテキストは短編作品“The Snows of Kilimanjaro”(1936)であるが、その特徴を分節化するために、他の短編“Cat in the Rain”(1925)、“Hills Like White Elephants”(1927)、“A Simple Enquiry”(1927)、“The Sea Change”(1930)、“The Light of the World”(1932)、“A Day's Wait”(1933)、の調査も行い、さらに時代的なイデオロギーと表現をめぐるヘミングウェイの格闘を調査するために長編作品“The Sun Also Rises”(1926)も読解し、テーマ別調査を行った。これらの作品の調査においては、まず1.古典的な精読の手法を用い、2.作品中の核心部分における表現手法を詳らかにするとともに、その英文法が生成する意味も分析し、3.それらの表現が時代の文化と政治が帯びるイデオロギーとどのような対応関係になっているのか、4.これを通してヘミングウェイがどのような修辞芸術を目指していたのか、を明らかにすることが目標である。

4. 研究成果

2018年は、パリで開催された第18回国際ヘミングウェイ学会にて、ヘミングウェイの1930年代の代表的な短編の一つである“The Snow of Kilimanjaro”(1936)における特異な表現技法についての英語による総論的な口頭発表を行った。ここにおいては、この作品の特徴ともいえる結末の二重のリアリティが如何にして実現されているのかを問題設定に議論した。仮説としてこの結末は、これまでの作家の代表的な書法である冰山理論(八分の七を水面下に隠す手法)というよりも、むしろ「disfiguration 脱 = 形象化」と呼ぶべき表現手法を用い、それまで小説のリアリティが構えていたリアリティを歪曲させ、あたかも同質の二重のリアリティが併存しているかのように見せる手法を用いていると主張した。さらにそれと関連する1920年代のヘミングウェイの長編小説の書法に関し、日本ヘミングウェイ協会第29回全国大会のシンポジウム『ヘミングウェイと女性表象「悪女」、「誘う女」、「病む女」を再読する』において口頭発表を行った。ここではヘミングウェイが1926年時点でどのように女性を描いていたのかを分析することで、10年をかけてどのようにdisfigurationという手法に辿りついたのかを探った。この調査によって、ヘミングウェイが1926年当初においても、表現手法において、冰山理論というよりも精緻な文法的操作を通して、時代のイデオロギーに支配されないような精密な表現を実践していたことを提示した。中心人物の一人である英国貴婦人のブレット・アシュリーは1980年代以降のフェミニズム批評においては“New Woman(新しい女性)”と位置付けられているが、この研究が強調したのは、ヘミングウェイがそのようなイデオロジカルな意味付けをまるで永久に無効にするかのような、実に精密な描写方法を用いて、誤読させない戦略が採られていたという事実である。つまり、英文法的にも精読すればするほど、“New Woman”ではないという事実が

浮かび上がってくるよう描かれている、という仮説を主張した。

2019 年は、前年度学会にて提出した仮説をより広範囲に応用し、本課題のメインテキストである“The Snows of Kilimanjaro” (1936) の特質を分節化するために、他の短編作品 “Cat in the Rain” (1925)、“Hills Like White Elephants”(1927)、“A Simple Enquiry”(1927)、“The Sea Change” (1930)、“The Light of the World”(1932)、“A Day’s Wait”(1933)の個別研究を進め、ヘミングウェイの表現の精密さを、文体や文法的意味、さらに作品の文脈から測定した。この成果は、ヘミングウェイの代表的な作品における修辞技法を分析・読解する著書『ヘミングウェイで学ぶ英文法』（アスク出版、2019）において公表した。また同年に、前年度の研究成果を研究論文「シャネルを着た貴婦人ブレット・アシュリー — 読むことの困難、1980年代フェミニズム思想、服飾文化をめぐる」（『ヘミングウェイ研究』第20号）を学会誌に掲載させた。

さらに同年には、イラン国立マザンダラン大学で開催された国際学会において学会発表(招聘)

“Integrating Without Diminishing the Polyvalence of Different Worlds: Toward a (Syn-)Aesthetic Moment in Reading Hemingway’s Literature”を行い、“The International Scholar Award”を受賞された。ここにおいては、ヘミングウェイ作品において映し出される女性像が、イデオロジカルな価値観を差し引いてその文体のみを精読すれば、実はこれまで言われてきたような男性中心主義的とは言えない表現が実現されていることを示した。例えば、“Cat in the Rain”(1925)における女性はこれまで言説においては「妊娠(あるいは妊娠願望)説」が主流だったが、Robert Scholes と Nancy R. Comley による *Hemingway’s Gender: Rereading the Hemingway Text* (1994) の手法に基づき、さらに英文法的な精読も含めて精読をしてみれば、実はそれを可能にしているのは読者の中にある女性の身体症状に対する先入観でしかないという事実を示した。実際に、登場人物の女性の子宮の部位に何か知覚された身体現象を妊娠と現象に即座に結びつけることは、読者の男性中心主義的イデオロギーでしかない、という議論を行った。

2020 年は、発表予定だった第 19 回国際ヘミングウェイ学会が新型コロナの世界的蔓延により延期となってしまったが、同時に関連する研究の流れが一時中断することになってしまった。だが、路線を変え、採択課題の根幹で関わるテキストの問題に立ち帰り、テキスト論を一から検討しなおし「自分の人生を歩むためにテキストを読解しよう」(『第三文明』、2020 年 4 月号)に掲載できた。ここにおいては、テキストを読むことは、現在の自己がどのようなものであるのかを規定することと同義であるために、正確にテキストを読むことが己を把握する上で如何に重要であるのかを唱えた。実際にヘミングウェイは男性中心主義的な観念をもった作家として 1980 年代以降のフェミニズム言説においてこれまで批判され続けてきたが、作家の表現の一つ一つを丁寧に辿ってみれば、実はそのようなイデオロジカルな烙印は押せない、という主張を論じた。

2021 年も前年度と同様に、第 19 回国際ヘミングウェイ学会の発表が、新型コロナの影響で中止となり、約束していた口頭発表成果を出せなかったが、代わりに、本課題研究と根幹で関わる 1880 年代からのアメリカの帝国主義とヘミングウェイの源流の一人であるマーク・トウェインの研究を進め、最終的に研究論文「セオドア・ローズヴェルトとマーク・トウェインのアメリカの原理をめぐる闘争 — 一九世紀末アメリカ帝国主義、クロスメディア・バトル、カウンターとしての文学的想像力」『帝国とメディア』(「IV 帝国とアーキテクチャ」第 12 章)塚田幸光監修(小鳥遊書房、2021 年)を出版できた。ここにおいては、セオドア・ローズヴェルトが国内外に推進した帝国主義政策の政治的・文化的・文学的影響をまとめつつ、文学者マーク・トウェインがどのように “The Adventures of Huckleberry Finn” (1885)においてそれに抗ったのかを分析し、小説とその文体がどのような文学的想像力を通して帝国主義への抵抗の導火線を実現していたのか論じた。

2022 年度は第 19 回国際ヘミングウェイ学会が開催されたが未だ高いコロナ感染のリスクのため渡航中

止の判断をせざるを得なかった。だが、秋にハンブルグ大学主催のヴァーチャル会議にてヘミングウェイの1930年代の「ゼロ」に収束する虚無の文体思想に関する口頭発表 "Toward Zero: The Writing Aesthetic of Hemingway's Short Stories in the 1930's" を行った。また2022年度末に研究論文「消散するカタチ - - アーネスト・ヘミングウェイ「キリマンジャロの雪」への宗教的読解と詩学の宛先」『人文研紀要』104号(中央大学)を上梓できた。ここにおいては、ヘミングウェイの“disfiguration(脱=形象化)”と呼ぶべきリアリズムの手法が、小説において最終的にあらゆるカタチが消散させ、最終的に中心人物であるハリーはキリマンジャロ山の頂の「雪」に向かって墜落する、つまり小説の中心意識そのものが「白」というにカタチのない色に向かう構図を説明した。つまり結論として、ヘミングウェイの文体美学の向かう目標は、脱=形象的であり、最終的には「白」という無、虚無の世界に向かうという議論をした。だがこの議論は、まだ発展途上というべきであり、ヘミングウェイの文体美学のありようをさらに探る必要性が見いだすこととなった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 河田英介	4. 巻 4月号
2. 論文標題 「自分の人生を歩むためにテキストを読解しよう」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『第三文明』	6. 最初と最後の頁 81-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河田英介	4. 巻 第20号
2. 論文標題 「シャネルを着た貴婦人ブレット・アシュリー 読むことの困難、1980年代フェミニズム思想、服飾文化をめぐって」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ヘミングウェイ研究』第20号	6. 最初と最後の頁 13-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河田英介	4. 巻 104
2. 論文標題 消散するカタチーアーネスト・ヘミングウェイ「キリマンジャロの雪」への宗教的読解と詩学の宛先	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『人文研紀要』	6. 最初と最後の頁 159-197
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Eisuke Kawada
2. 発表標題 "Integrating without Diminishing the Polyvalence of Different Worlds: Toward a (Syn)Aesthetic Moment in Reading Hemingway's Literature"
3. 学会等名 The First English Literature and ELT Conference (Iran) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Eisuke Kawda
2. 発表標題 "Refiguring the Realism of 'The Snows of Kilimanjaro'"
3. 学会等名 XVIII Biennial International Hemingway Society Conference in Paris (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河田英介
2. 発表標題 「ファム・ファタル、ニュー・ウーマン、あるいはシャネラー 『日はまた昇る』における貴婦人プレット・アシュリ の肖像」(シンポジウム『ヘミングウェイと女性表象 「悪女」、「誘う女」、「病む女」を再読する』)
3. 学会等名 日本ヘミングウェイ協会全国大会(第29回大会)(於: 関西学院大学)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Eisuke Kawada
2. 発表標題 Toward Zero: The Writing Aesthetic of Hemingway's Short Stories in the 1930's
3. 学会等名 An International Virtual Symposium at the University of Hamburg: Recuperating "Dark Modernity: Hemingway to Film Noir--- East-West Perspectives" (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 塚田 幸光編、河田英介、小笠原亜衣、高村峰生、村上東、中垣恒太郎、その他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 小鳥遊書房	5. 総ページ数 382
3. 書名 「セオドア・ローズヴェルトとマーク・トウェインのアメリカの原理をめぐる闘争 一九世紀末アメリカ帝国主義、クロスメディア・バトル、カウンターとしての文学的想像力」『メディアと帝国』	

1. 著者名 河田英介、倉林秀男	4. 発行年 2019年
2. 出版社 アスク出版	5. 総ページ数 312
3. 書名 『ヘミングウェイで学ぶ英文法』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
The First English Literature and ELT Conference (University of Mazandaran, Iran)	2019年～2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ドイツ	The University of Hamburg		
イラン	The University of Mazandaran		